その他
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究10
P.21－26（2022）

2020 年度カリキュラム評価に基づく今後の課題

Future issues based on the 2020 curriculum evaluation

栗　原　明　美*　　根　岸　隆　介*　　横　山　悦　子*
KURIHARA Akemi　　NEGISHI Ryusuke　　YOKOYAMA Etsuko

要　旨

本調査は、2022 年度のカリキュラム改正にあたり、本学部の現行カリキュラムが目標としている知識・技術・人間性を高める学習の成果を明らかにすることを目的とした。対象は 2021 年 3 月に本学に在籍していた 1 年生から 4 年生および卒後 1 年目の看護師、計 512 名で、Web 上に掲げた（卒業生には郵送による）ディプロマポリシーの達成状況に関する自記式質問紙調査を行った。結果、全学年を通じて最も達成度が高かったディプロマポリシーは、「科学的な根拠に基づき対象に必要な看護を実践する能力」であり、反対に最も低かったディプロマポリシーは、「教養を身につけた市民として行動できる能力」であった。今後は本調査結果を踏まえ、2022 年度のカリキュラム改正にむけて学生の学修意欲向上のため、より充実した教育体制の構築に繋げたい。

索 引 用 語：ディプロマポリシー、在学生によるカリキュラム評価
Key words：Diplomapolicy, Student curriculum evaluation

Ⅰ．はじめに

順天堂大学（以下、「本学」）の学是は、「仁」を大切に育み、「仁」のこころを持って人々の健康に貢献できる看護職者を育成することである。保健看護学部（以下、「本学部」）のディプロマポリシーは、「仁」の精神を基盤に「心身を癒す看護実践能力を修得する」ことを教育理念として（1）「他者への思いやり、慈しむ心を持ち、心身を癒す看護を実践できる能力」、（2）「看護を必要としている人々に対して、科学的根拠に基づき看護を実践できる能力」、（3）「保健医療福祉における看護職者の専門性を自覚し、他職種と連携、協働できる能力」、（4）「グローバル化する看護職者の活躍の場で役割を担うために、国際的視野を持ち、異文化を理解する能力」、（5）「看護への関心を深め、探求心を持って研究に取り組むことができる能力」、（6）「自らの健康維持増進に留意して行動的に学び続けることができる能力」という 6 つを掲げ、それらの能力を修得するために「人間と教養」、「人間の健康」、「看護の理論と方法」、「保健看護の統合と発展」の 4 つの科目群でカリキュラムが構成されており、

＊ 順天堂大学保健看護学部
＊ *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

（Nov. 25, 2021　原稿受付）（Nov. 25, 2021　原稿受領）

段階的にそれらの能力が身につけられるように工夫されている。平成 29 年に開催された文部科学省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」にて策定された「看護教育モデル・コア・カリキュラム」を受け、本学部のカリキュラムがこれらのモデルを網羅しているか確認すると共に、近年大学教育に求められているアクティブラーニングの実施を促進するために、カリキュラムの改定を行うこととなった。

II．本調査の目的

2022 年度に予定されているカリキュラム改定の準備として、カリキュラムの根幹をなす本学部ディプロマポリシーの達成度を評価することを目的とする。

III．調査方法

1．対象者

調査対象者は、2020 年度本学に在学していた 1 年生から 4 年生 475 名と、2021 年 2 月の時点で既卒 1 年目となる本学部卒業生 120 名で、調査は 2021 年 2 月から 2021 年 4 月に行われた。

2．データ収集方法

4 年生には国家試験受験票配布のために登校した 2021 年 2 月、1 年～ 3 年生には 2021 年 4 月の新学期ガイダンス時にグーグルフォームで作成したカリキュラム評価アンケートにその場で回答を求めた。在校生には可能な限り全員の協力を得ることを目的に、回答締め切り日後、1 度だけ未回答者に対し協力依頼のリマインダーメールを送信し、既卒生には、2021 年 2 月、順天堂大学医学部附属静岡病院看護部に協力を依頼し、回答用 QR コードを看護部から配属先病棟に配付いただいた。また静岡病院以外の医学部附属病院および全国の附属病院以外の施設で働いている既卒生については、2021 年 2 月保護者宅にアンケート協力のお願いと回答用 QR コードを封書にて送付し、保護者と別居している既卒生には、保護者から卒業生へ QR コードの転送を依頼した。回答の集計は事務担当者が行い、各学年の提出された日時順に集計した一覧表から個人が特定できる学籍番号を除いた状態で作成されたエクセル表を作成した。

3．調査内容および分析方法

在学生および既卒生は、本学部カリキュラムのディプロマポリシー（以下 DP）No1 から No10 について、この 1 年間を振り返りどの程度達成できたか（学びが深まったか)、現時点で感じている状況を 1 （できない）から 10（できる）で評価するよう求めた。

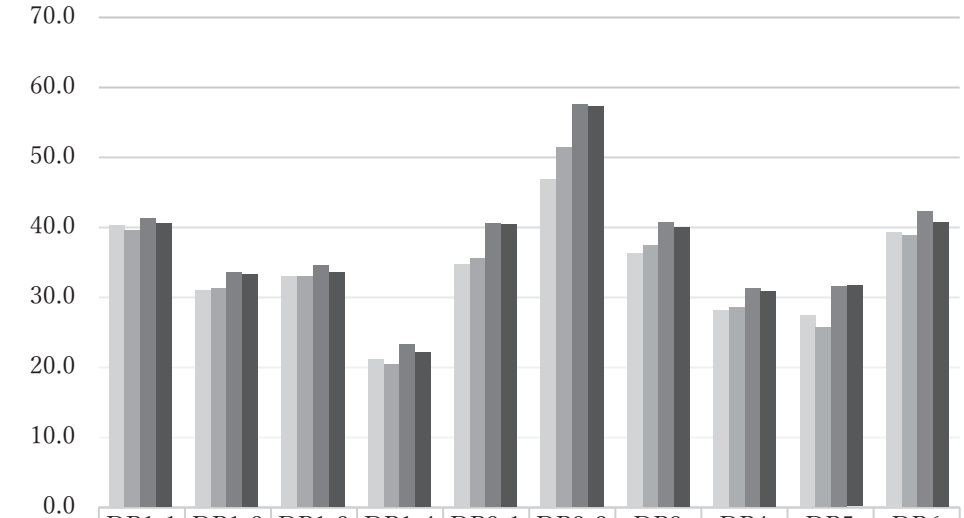
分析は、まず DP1 から DP10 に対して学年別に基本統計量を算出した後、1 年生から既卒生までの 5 群間で、DP ごとに一元配置の分散分析（その後の検定：Tukey(T)）を行った。次に、個々の DP1 から DP 10 について、同じ方法で学年別 DP の比較をおこなった。各統計解析には、SPSS,Ver25 を用い、有意水準を 5% 未満とした。比較にあたり、DP1 と DP2 はそれぞれ複数の項目があるため、DP1-1 から DP1-4 の値の平均値を DP1 とし、DP2-1、DP2-2 の値の平均値を DP2 とし、DP1 から DP6 として比較をした。

IV．結　果

1．対象者の属性

1 年生 122 名（回答率 99.2%)、2 年生 125 名（回答率 100%)、3 年生 118 名（回答率 99.2%)、4 年生 110 名（回答率 82.6%）であった。一方卒後 1 年の既卒生は 37 名（回答率 35.2%）で、順天堂大学医学部附属 6 病院に看護師として勤務している既卒生は 28 名 (全体の 75.7%)、附属病院以外の医療施設に勤務している既卒生 5 名 (13.5%)、その他として行政保健師等 (10.8%) であった。しかし在校生と比べると回答数が少ないため、今回の分析からは除外した。

図 1　対各学年の DP得点の傾向



	DP1-1	DP1-2	DP1-3	DP1-4	DP2-1	DP2-2	DP3	DP4	DP5	DP6
1年生	40.2	31.0	33.0	21.2	34.7	46.8	36.3	28.1	27.3	39.2
2年生	39.6	31.2	33.0	20.4	35.5	51.4	37.3	28.5	25.7	38.8
3年生	41.2	33.5	34.5	23.2	40.6	57.6	40.7	31.2	31.5	42.3
4年生	40.5	33.2	33.6	22.1	40.4	57.3	40.0	30.8	31.6	40.7

2．各学年における DP 得点の達成度

本学部の学生はすべての学年において最も達成度評価が高かった項目は、DP2-2（科学的な根拠に基づき対象に必要な看護を実践する能力）であり、反対に最も低かった項目も同様に、すべての学年で DP1-4(教養を身につけた市民として行動できる能力) であった。

DP 得点の傾向を図 1 に示す。

3．DP 得点達成度の学年別比較

DP1 から DP10 の各項目について、学年ごとに比較したところ、すべての項目で有意差が認められ、1、2 年生より 3、4 年生で得点が高かった。

DP1（心身を癒す看護実践能力）は、F 値 =3.97、p <0.01 であり、1 年生と 3 年生（p<0.01）、2 年生と 3 年生（p<0.01）の間で有意差が認められた。

DP2（科学的根拠のある看護実践能力）については、F 値 =19.65、 p <0.001 で、1 年生と 2 年生の間では有意差は認められないが、1 年生と 3、4 年生 (p<0.001)、2 年生と 3、4 年生 (p<0.001) でそれぞれ有意差が認められた。

DP3（他職種連携能力）は、F 値 =7.84、p <0.001 で、1 年生と 3 年生 (p<0.001)、4 年生（p<0.01) の間で有意差があり、2 年生と 3 年生 (p0.05)、4 年生 (p<0.05) においても有意差が認められた。

DP4（国際的視野をもつ実践能力）は、F 値 =5.30、p <0.001 で、1 年生と 3 年生（p<0.01)、4 年生 (p<0.05)、2 年生と 3 年生（p<0.05）の間で有意差が認められた。

DP5（研究の視点をもった実践能力）は、F 値 =17.41、p <0.001 で、1 年生と 3、4 年生（p<0.001)、2 年生と 3、4 年生（p<0.001）に有意差が認められた。

DP6（自律的に研鑽し発展していく能力）は、F 値 =5.04、p <0.01 で、1 年生と 3 年生（p<0.01)、2 年生と 3 年生（p<0.01）で有意差がそれぞれ認められた。

図 2　学年別 DP得点の比較

DP	コンピテンス	学年	平均±SD	F値	多重比較
他者への思いやり慈しむ心を持ち、心身を癒す看護を実践できる能力（DP1）	仁の精神に基づいた看護を実践する能力(DP1-1)	1年生	40.1±6.1	3.97**	1年<3年 2年<3年
		2年生	39.6±6.0		
		3年生	41.2±5.8		
		4年生	40.5±6.3		
	倫理的課題に対応する基礎的能力(DP1-2)	1年生	31.0±5.6		
		2年生	31.2±5.0		
		3年生	33.5±4.6		
		4年生	33.2±4.5		
	人間関係を構築できるコミュニケーション能力(DP1-3)	1年生	33.0±4.7		
		2年生	33.0±5.0		
		3年生	34.5±4.2		
		4年生	33.6±4.6		
	教養を身につけた市民として行動できる能力(DP1-4)	1年生	21.2±5.1		
		2年生	20.4±5.7		
		3年生	23.2±4.0		
		4年生	22.1±4.2		
看護を必要としている人々に対して、科学的根拠に基づき看護を実践できる能力（DP2）	看護に関連する諸学問の知識に基づいたアセスメント能力（DP2-1）	1年生	34.7±9.0	19.65***	1年＜3、4年 2年<3、4年
		2年生	35.5±8.1		
		3年生	40.6±5.9		
		4年生	40.4±5.7		
	科学的な根拠に基づき対象に必要な看護を実践する能力（DP2-2）	1年生	46.8±14.0		
		2年生	51.4±11.0		
		3年生	57.6±7.8		
		4年生	57.3±7.9		
保健医療福祉における看護職の専門性を自覚し、他職種と連携、協働できる能力（DP3）	保健医療福祉のケア環境において他職種と連携し協働する能力	1年生	36.3±8.5	7.84***	1年＜3、4年 2年<3、4年
		2年生	37.3±7.5		
		3年生	40.7±5.5		
		4年生	40.0±5.4		
グローバル化する看護職者の活動の場で役割を担うために、国際的な視野を持ち異文化を理解する能力（DP4）	看護職者として国際的視野を持ち活動できる基礎能力	1年生	28.1±7.5	5.30***	1年＜3、4年 2年<3年
		2年生	28.5±7.0		
		3年生	31.2±5.3		
		4年生	30.8±5.9		
看護への関心を深め、探求心を持って研究に取り組むことができる能力（DP5）	研究的視点を持ち看護を探求する能力	1年生	27.3±7.4	17.41***	1年＜3、4年 2年<3、4年
		2年生	25.7±8.3		
		3年生	31.5±5.0		
		4年生	31.6±4.8		
自らの健康維持増進に留意して行動的に学び続けることができる能力（DP6）	専門職者として自律的に研鑽し続け、専門性を発展させる能力	1年生	39.2±7.3	5.04**	1年＜3年 2年<3年
		2年生	38.7±7.6		
		3年生	42.3±5.4		
		4年生	40.7±6.1		

DP 項目得点の学年別比較を図 2 に示す。

Ⅴ．考　察

1．学生によるディプロマポリシー達成度評価

本学部の現行教育カリキュラムについて、学生自身で修得の度合いを評価した結果、全学年で最も達成度の高かったディプロマポリシーは、「科学的な根拠に基づき対象に必要な看護を実践する能力 (DP2C-6)」であった。このポリシーを達成するために開講されている科目は、<1 年次 > 形態機能学Ⅰ、生化学、微生物学、環境とエコロジー、医療の歴史、薬理学、臨床医学Ⅰ、統計学、看護の歴史・看護理論、生活援助技術、基礎看護実習Ⅰ、成人看護学基礎、<2 年次 > 生命現象の化学、臨床心理学、形態機能学Ⅱ、病理病態学、リハビリテーション概論、フィジカルアセスメント、看護過程Ⅰ、臨床医学Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、成人看護方法論急性期Ⅰ、Ⅱ、基礎看護学実習Ⅱ、在宅看護方法論Ⅰ、公衆衛生看護学基礎、疫学・保健統計Ⅰ、臨床医学Ⅲ、Ⅵ、診療援助技術、小児看護方法論Ⅰ、成人看護方法論慢性期Ⅱ、高齢者看護方法論Ⅱ、公衆衛生看護方法論Ⅰと続く。これらの科目はいずれも看護師・保健師を養成する上で不可欠と言える専門科目群であるため、本学部のカリキュラムが全学年を通じて Evidence Based Nursing (EBN) あるいは Evidence-Based Practice (EBP) に基づいた教育が行われていることを示している。次回のカリキュラム改正においても、医療、看護をとりまく環境の変化に対応できる看護師・保健師の養成を継続していくためには、私達教員も、現時点で得られる最新の Evidence Based Nursing を取り入れた教育ができるよう、さらなる自己研鑽が求められる。

一方、最も低かったディプロマポリシーは、こちらも全学年共通で「教養を身につけた市民として行動できる能力 (DP1C-4)」であった。このポリシーの達成に関連する科目は、<1 年次 > 中国語、文学の愉しみ、教育学、子供の発達と教育、法と生活、社会行動論、基礎化学、野外スポーツ実習、保健学概論、家族関係論、日本文化論、人間の生き方、美術、教養ゼミナール、<2 年次 > 現代社会と政治経済、世界と日本現代史、生活科学、ライティングスキル、社会保障と社会福祉等の教養科目と呼ばれる科目群で構成されている。一般的に看護系大学の教養科目は 1 年次から 2 年次にかけて開講されていることが多いため、専門科目の修得や臨地実習が主体となる上級生の達成度自己評価得点が低いことは想定内と言える。杉野らによると[1)]、岐阜県立看護大学では教養教育を 4 年間通して学ぶカリキュラムを構築しており、臨地実習を体験したことで新たに湧き出た問いに対し、主体的に教養科目選択、受講することで、自分の問いにアプローチすることが可能となるという。本学も最終学年での一般教養科目を開講しても良いのかもしれない。下級生で「教養を身につけた市民として行動できる能力」の達成度得点が低いことについては、石光らが報告している[2)]、「大学では専門的な知識や技術だけ学べばよいと考える看護学生は全体の 1 割であったものの、選択科目や一般教養的な科目に関心のある学生は全体の 4 割であり、それらの科目の増加を望んでいる学生は全体の 3 割であった」ことと類似しているのかもしれない。また、「教養を身につけた市民としての行動」が、下級生にとって、何をもって（どの科目をして）市民としての能力を評価すればよいのか、戸惑う側面もあるように感じた。

Ⅵ．調査の限界

本調査は横断的調査による比較であるため、時間軸に基づく因果関係が明らかでないこと、入学時の偏差値が学年間で異なること等、バイアスが多い。そのため今後は引き続き調査を続け、1 年次から 4 年次までの評価を蓄積した縦断的調査で得たデータを分析していく必要がある。また本学を卒業した学生の卒後の影響を評価することも有益であると考えられるため、既

卒生の回答率をあげる工夫を見出す必要がある。

一方、アクティブラーニングに対する評価や学生の教育ニーズ、教育の充実度や満足度、能力の変化等についての調査は行われていない。葛城は、学生が実際に獲得した教育成果を問う場合は、どのような教育が提供されたかを問うだけでは不十分であり、学生がどのような学習経験をしたかを問う必要があると言う[3)]。本学部のカリキュラム評価における今後の課題としたい。

Ⅶ. 結　論

本調査の結果から本学部における現行教育カリキュラムの特徴は、「科学的な根拠に基づき対象に必要な看護を実践する能力」は達成されているが、「教養を身につけた市民として行動できる能力」は教育効果が低いことが明らかとなった。今後は本調査結果および各科目の授業評価を踏まえ、2022 年度のカリキュラム改正にむけて学生の学修意欲向上のため、より充実した教育体制の構築に繋げたい。

謝　辞

本調査に快く回答いただいた在学生と既卒生の皆様に心より感謝申しあげます。

引用文献

1）杉野緑、梅津美香、森仁実、山田洋子、小澤和弘、他. 岐阜県立看護大学における教養教育の特性. 岐阜県立看護大学紀要. 第 20 巻特別号 13-20, 2019.

2）石光芙美子、上田昇、マービンスミス 神原裕子、佐藤亜月子、堤千鶴子. 看護学教育カリキュラムにおける基礎教育科目の検討２―本学看護学部学生調査結果からの考察―. 目白大学健康科学研究. 第４号 61-67, 2011.

3）葛城浩一. 在学生によるカリキュラム評価の可能性と限界. 高等教育研究第 9 集　161-180, 2006.